

“食”を拒むことが意味するもの

——「死にたい」ではなく、「消えたい」——

法政大学大学院 宮下阿子

1. 目的

「摂食障害 (Eating Disorder)」の中でも、とりわけ「拒食症」は歴史が古く、拒食については時代ごとにさまざまな解釈がされてきた。代表的なものに、P・ジャネの症例報告 (1903 年) を起源とする、思春期における「成熟拒否」や「女性性の否定」といった見方がある (下坂 [1988]2007)。また、拒食や拒食症的身体は、ジェンダー規範に対する女性たちの抵抗としても表象されてきた。実際に、社会学の文脈では、女性を取り巻く社会環境に摂食障害の原因を求める解釈が提示されている (浅野 1996)。加えて、摂食障害のきっかけとして、今日しばしば指摘されるのがダイエットである。中村英代によれば、摂食障害に特徴的な傾向とされる「瘦身願望」「自己コントロールの欲求」「低い自己評価」は、「ダイエット行動を継続する過程」で形成されるという (中村 2011)。

従来の研究では、「なぜ痩せようとするのか」という「痩せること」の意味に重点が置かれ、“食”を拒むことは、即ち「痩せること」として理解されてきた。そのため、“食”を拒むことそれ自体——食べる／食べないこと——の意味は、必ずしも十分に検討されてこなかったといえる。本報告では、ある拒食の語りを事例に、〈摂食障害 (と呼ばれる出来事)〉における“食”を拒むことが、本人にとって、どのような意味を持って経験されているのかを明らかにする。

2. 方法

本報告では、〈摂食障害〉を抱えたある当事者の語りを事例として取り上げる。使用するデータは、報告者が 2010 年に実施したインタビュー調査にもとづくものである。調査協力者 (C さん) は、10 年以上前に「摂食障害」と診断され、拒食と過食の両方を経験し、今現在は「なんとなく治まってきて」、食事は「普通に食べて [いる]」という 30 代前半の女性である。この報告では、彼女が診断後、何年も続いたという「拒食のとき」を振り返っている語りを中心に分析を行う。

3. 結果

C さんの語りからは、次の 2 点が明らかになる——第 1 に、拒食の継続によって、極端に痩せてしまったとき、彼女に「痩せたい」という気持ちはなく、「消えたい」という気持ちが強かったということ、第 2 に、それが「死にたい」ではなく、「消えたい」であったということ。

彼女によれば、「死にたい」と言うとき、それは「今、生きていること」が前提となる。だからこそ、拒食のときは「死にたい」ではなく、「消えたい」。一方、過食のときは「もっと具体的に、消えたいんじゃないかって、死にたいだった」と振り返っている。

4. 結論

最後に、事例における「消えたい」と「死にたい」ということばの経験的な意味の違いをもとに、E・レヴィナスの概念を手がかりにしながら、“食”を拒むことが意味するものについて考察を加えたい。我々は身体として生きている限り、「糧」を「享受」しなければ生きていくことができない。したがって、C さんの語りを言い換えれば、「死にたい」と言うとき、それは何らかの「苦しみ」としての生の享受を前提とする。だとすれば、“食”を拒み「消えたい」と言うとき、それは享受という生の前提それ自体との葛藤として読み取ることができるのではないだろうか。

文献

- 浅野千恵, 1996, 『女はなぜやせようとするのか——摂食障害とジェンダー』勁草書房。
中村英代, 2011, 『摂食障害の語り——〈回復〉の臨床社会学』新曜社。
下坂幸三, [1988]2007, 『アノレクシア・ネルヴォーザ論考』金剛出版。